

寛永諸家譜

清和源氏十四冊之内
満岐流

55

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186(55)
函號	特 76 1



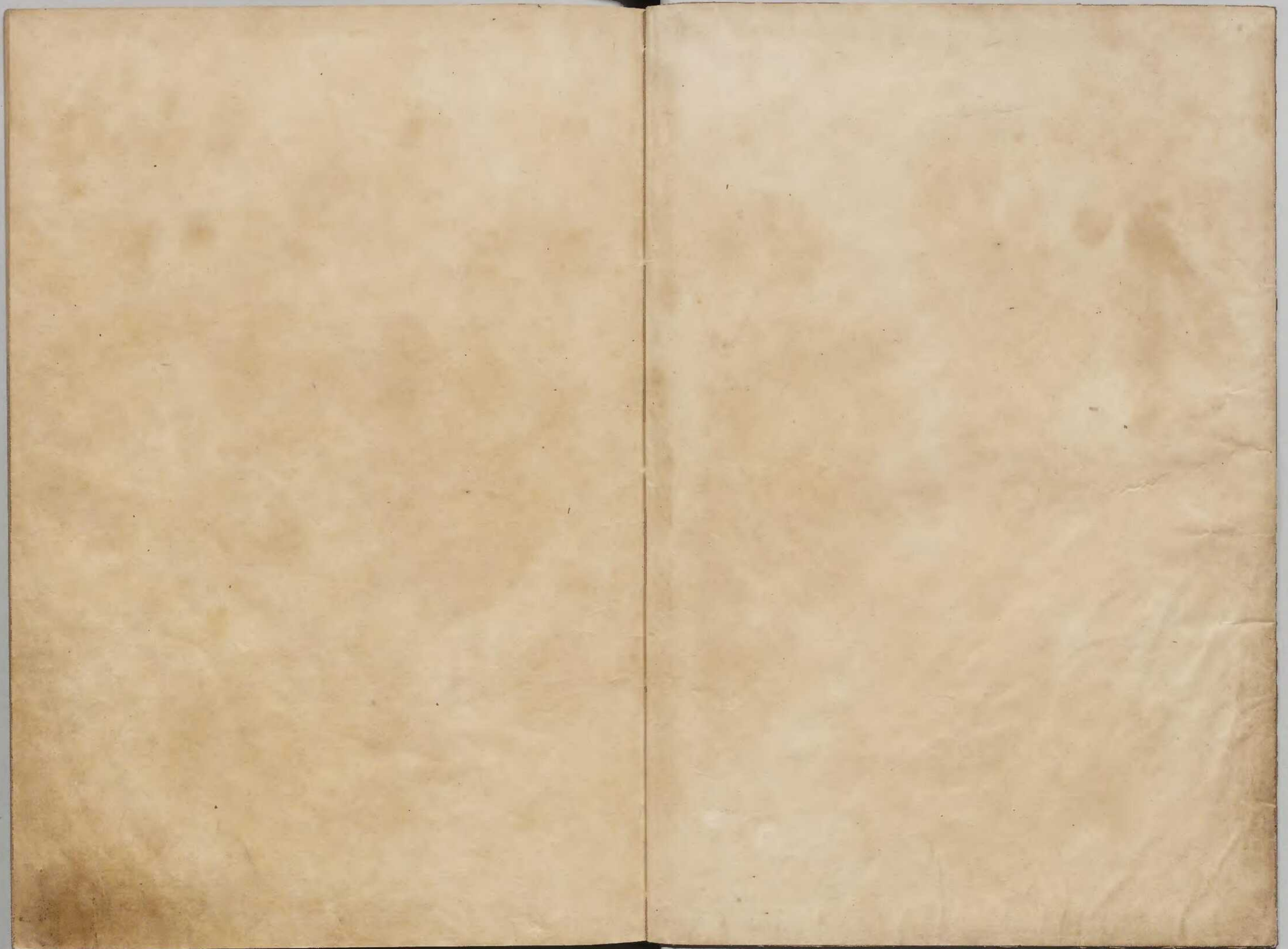
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





諏訪

安部

有賀

行桐

知久

屋代

室賀

諏訪部

飯田

松本

寛永諸家系圖傳

清和源氏

五三

滿枝流

諏訪

清和天皇御代御仲弟

満枝

下野守

相模守

右衛門尉

後位下

檢校遠使

淺草文庫

満國 まんこく

甲斐守 かいしゅ 恒又佐下 つねまたさか 壹江守 いつかうしゅ 伊豆守 いづしゅ

為海 なみ

甲斐守 恒又佐下

為公 たけこう

信濃守 恒又佐下 しんのうしゅ 大馬助 おほうまのすけ 伊豆守 いづしゅ

母河内守頼信 ははのちのすけよりぶね じしめ

為實 たけざね

依田六郎 よした

實信 さねのぶ

依田正房 よしたのむねむら 大吏 おほし

依田 よした

依田之廊 よしたのりやう

信澄のぶずみ

手塚右衛門てづかの

信綱のぶつな

手塚又右衛門

感重のりふか

右兵衛尉ひやぶさ 飯沼右衛門いひの 法名蓮佛はるき

嘉禎元年かじゆん 總念火すんねん 火ひの時とき 感重のりふか 守まもりすするるやぶ
せつせつくく 諸人しよじん 小こゆゆええかかててまま火ひと
ううららけけ 火ひ災さいととくくとと
建長けんぢやう六年ろくにん 一いち堂だうとと山やまの内うちにに建けん立たててしし
感重のりふか 一いち生せいれれ 乃の總すん念ねん火ひ中ちゆう 法はふ師し法はふ師しにに
ああづづかかふふるるおおいいひひ

感重のりふか

飯沼右衛門尉いひの

威經 きん

誼訪之島在野射 すいほうのしまにのりや

建名年中 けんめいねんちゆう 猶念よ なほねんよ わりて わりて 骨中 ほねちゆう 一 いち

威頼 きり

左清尉 さしみ

出家 しゅけ 一 いち 七 しち 去性 きよじやう 也 や 年 ねん 一 いち

重於 ちゆう

大進房 だいしんぶふ

宗經 しゆけい

信濃守 しんのう

信守 しんしゆ

信濃指馬 しんのうさしうま

時繼 ときつぐ

左清尉 さしみ

威世

小島在武村

觀應二年言播磨守師冬甲別河次此
城下たぐりふ付威世飯沼の大祝三丸
小うまよせしるこしども威世ハ師冬と
しあゆ取城中に入師冬同く
付死

時重

小島

利發一て見相こま

時信

信流守

由徳年中山名氏清謀叛れこま時信
戦功あり

忠海

忠島

法名忠意

忠重 ちかひ

右馬廐尉

信徳寺 しんとく

頼継 よりつぐ

小右衛門

法名善寛 ぜんかん

應仁年中細川勝元より

山名宗全と合戦す

頼清 よりひら

刑部少輔 小右衛門 法名道海 だうかい

信貞 しんてい

信徳寺 法名道宗 だうしゆ

いづれに信貞乃高遠よりて高をい
祖とす

信有 しんあり

信徳寺 五郎 法名良淳 りやうじゆん

海有 うみあり

以島左衛門 法名心史 しんし

政酒 まさけ

信濃守 後土佐下 あごのり 法名 智庭 ちぢ

諏訪大祝 諏訪氏と滅して主地と飲見 すわいのあそび

わして弘治年中 政酒とてなる酒と こうじ

あつてあつて あつ 酔 よひ してはわにあら

して飲見とすめわつて のり 政酒が飲見

ふおわもに うあひ して政酒が子孫は しん

て あつ 地氏に そのち

うしつら こと 事なり

頼備 よりとも

小太郎 おきり 安藝守 あごのり 後土佐下 あごのり 法名 宗昌 むねまさ

頼隆 よりたか

刑部左衛門 けいぶのたよ

頼重 よりしげ

刑部左衛門

武田信玄の妹とめ如頼
甲州板垣少く信玄れとめに自殺す

長安侍者

満隣

新次郎 法名竺溪

頼豊

新古郎 越中守

大カれきこえあり

頼忠

小右郎 安藝守 従五位下

甲州向山しすめと書ゆす

頼重自殺乃後板垣氏をばぐめあり

頼忠板垣氏とけい

東照大権現と稱し甲州てしりけり

度の忠功あり

天正十年

大指現甲列と仰じたまふ時頼忠沖舟
に属す為きくく大久保七郎右衛門と仰
位下さ頼忠夜酒井右衛門ありてい
ひきふい信列我能成たるる信列乃
よのいふくくく日れふはくくく不
頼忠いしく我い

大指現よりあふかひはるる一いんぞ左衛門尉
小屋せんやとて回らせむ

大指現より大久保七郎右衛門指大織部と仰

こそれ織部市左衛門を使わしてひく
つ頼忠よはげくのこまらく信列を
大指現よりあふはれれよと意
のむひよはげく多し頼忠あの人芽時丹波
澤市左衛門はりて大久保七郎右衛門
許ふあわく約海となつてむ

大指現五人よりて誓約したまひ丹波
い沖舟と仰一市左衛門い沖舟織部を
下さるれふよ頼忠甲府より

大指規より存領す時より保昌五郎の沙羅指
とたまりて信らきけふ信列はら
沙羅下につらふ家よりこれあり母とやく
四ふかりて信の下ふとまるるや
の命いふと頼忠よかふ翌年沖
書紙たまりて飯沼那と女のごゆる
存領す

信列松本沖本陣の時頼忠先陣より
列を

馬田氏と追討の時頼忠先陣よりありて
馬田が家人柳澤宗女より頼忠頼忠が
家人も又おほくうらねすは信列
九子におおくををるに敵火せり
より沖鷹とたまりて

同十二年長久手沙陣の時沖書とた
まわりて軍勢よりうすのよ又信よ
しりてを國し

本為沖出陣の時頼忠先陣にありて

多井峠にふかしくおたくかひ頼忠が共
なくうら死す又書勢ふても合我あり
同十八年小田原陣の時頼忠父子は
す沖陣の反義助の沖腰物とねん
同年

大権現頼忠が依地ヨシの負教とたづひたまふ時
言ことばこけふい飯訪那イハヒツナ三万石れ依地ヨシより
ことども乱らん後思ゴシおほく惹地カレチとらるる
六子貴ムスシの涉役セツヤクとほもろく〜中あく

終に〜り飯訪那とあつたため武川タケガハ奈良良
と梨母生シメノイ経川ツネガハあく二万石とたまふつら
之反文シノハ禄ロク元年一石れ地とねん
〜〜〜河江カハ〜〜〜と川カハ社
あく沖ウチ加治カヂと下シタれ依地ヨシの負教飯訪
那れ時トキの〜

長五年ナガヒト同原トウハラ沖陣ウチノアの時頼忠隠居れ
身ミ〜〜〜石川イシガハ日向ミナタち相平サウヘイ後
守モリ後ノチ浪ナミ織オリ初ハジメ等トウと同トウ〜〜〜江戸エドの涉セツ城シロ

とまり親時に頼忠の子頼水は
台座院殿よりあつたひきつりて志田に
頼忠七十一歳少く死す

頼水

小右衛門 因幡守 後み侍下

母甲州白山が女

大権現

台座院殿よりつとまりて志田に
つとまりて志田に

天正十年甲府におるく父頼忠也同
計よ

大権現の御

同十二年 釣命にいらは多岐守

康重の女とめゆふ

同十八年小田原陣れ時父頼忠同
く侍す

同十九年奥州沙陣より頼水奥州釋
費まうく侍すと津波陣れ後書子成

たづさくく江戸より来り
之後沙上海の時に於水伏

文禄二年 御命に
とほぐ

文禄四年

大権現揚羽大坂より海へまると時に水伏を

おとひさげまは
おとひさげまは

大権現これを感じたまひくね

こゝ後

大権現の沖伏少く伏見に

徳の沖着徳とつわじ

同五年に松京勝謀叛よりつこ

大権現今津一沖進發れ時に水伏見より

沖供いこつ津交ふつ

大権現殿よりさびむる高陣より

しく時り

此書をつとめられり又美田に

て正書す

同六年

大指現の命にいく飯沼の本領二万五石
と相取し又吉田の城に武器をとらま
し

同十年 涉入海の時侍身

同年 浪下位に叙し因幡守に任じ

同十九年 大坂陣のとき、甲府の涉書

とほとむ

元和元年 大坂五輪の時 涉侍して伏
見まじくおしむくこりわも又 侍
よりて甲府へ在番をつかじ

同四年

台座院殿より信州飛騨那少く五平

石の涉加増と相取す

寛永十八年 年七十二歳

頼定

久三郎

天正十二年人質^ヒかゝりて^レ駿府^ニあり

女子

名^ニ命^ニい^ハし^テく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて
去^リ成^ル行^ハか^ク母^トなり

女子

作^ル小^ノ守^ノく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて
内^ニ通^ル物^ト守^ル勝^ル母^トあり

忠澄

小倉邸

生國^ノ列物^ノ社

母^トい^ハし^テく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて

名^ニ命^ニい^ハし^テく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて

い^ハし^テく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて

天正十年十二月

名^ニ命^ニい^ハし^テく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて

ら^ビ小^ノ守^ノく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて

こ^ノ守^ノく^ニ去^リ成^ル山^ノ城^ニ守^ル定^メ義^トは^シて

領^トなり

同十一年

大指規と相し事

元和元年大坂御陣の内藤原を討つ
が彼に属し小笠原共討た相が手に
ありて天王寺に之を殺ししやうりそ
首とゆへり

同二年沖入海の時後五位下に叙し
おちさるし一領と

女子

大久保甚太郎の長守の妻牛助の母

頼卿

隼人正 中園同家

母の忠澄一おり

名法院殿下流之なる

安永十九年大坂御陣の時
定義の侍あり翌年大坂五乱の時
兄忠澄こゝろく侍あり

元和六年より御番とつねむ

寛永六年

左衛門尉より此へたてまつりし御服

御領正

同七年 御命に申し御小姓入但

らこたす

新長

丸門 生國 信州 坂宿

母ハ忠澄ト云

寛永十三年

將軍家より信州坂宿

女子

右衛門尉より此へたてまつりし御服

女子

集

大系亮

生國武州

いのりん 秀が ちたのくろり
家紋白虎よ之系黒梳

トめ っがのし
初ハ梳系

板行^下えれわりこ^上之^中は^下一^上家^中入^下末^上系^中よ

地^{たの}氏^ちおほ^おう^うな^なけ^け時^じ一^い系^いよ^うり

を^いら^まゆ

元真 もとまこと

母郡大蔵 あづまのたから

生國後河 なまごのくわに

付め今川氏真不はふ時よ武回信玄 いまがわのまこと ぶはふときよ ぶかいのしんげん

兵と川わく後河よ致向す氏真 へいとがわわくごのくにやちむかすのまこと

東照大権現とたのむふしを河越川小 とうしょうのたいこんげん と たのむ ふしをがわごせがわのこ

津出陣ありけは時畠次郎右衛門正綱を ついでしんありけはときはたしじょうゑもんせいこうを

後府入本丸とまりり元真父子二の ごふりほんまるとまりりもとまこと父子のふたりの

九し居す時小信玄よりひくかぬ書 くしゐすときせしんげんよりひくかぬがき

を元真ふよりりて信玄に属せんふ成 をもとまことよりりてしんげんにぞくせんふなり

ふ元真おとくらく今氏真がわやうきをを ふもとまことおとくらくいまのまことのがわやうきをを

見とて信玄の大敵小属すりい勇者 みとてしんげんのたいてきせしんぞくすりいゆうや

道よわすすやとてわてぬ書よおとす みちよわすすやとてわてぬがきよおとす

とていより元真後府入城し居しり とていよりもとまことごのふりいりり

事わすしりてとてとてとてとてとて ことわすしりてとてとてとてとてとて

すうに信玄伊川七村のうら田代河内 すうにしんげんいせがわしちむらのうらたしろのわち

御し書をめらていこく元真信 ごのしををめらていこくもとまことしん

勝よりらてきこふよのわらうのた かちよりらてきこふよのわらうのた

あまのひく黄ををるる處ト是に
田代河内郷のあの一揆とくして
おのひふたるあえまが家人のい
たかつて討死するもの四人幸に死
まわつるもの二人なりえま妻子たら
まゝ山路とて淡ねりおのじき

大権現(げし)とけきすまら共士
二十人えまよりたまふゆえまの
と川わく安部をりかつり田代河内

の一揆とくらやがり
ののち

大権現(げし)とけきすまら共士

かひく後河内らに
の津、村葉村の水見を去波川根
れ之主山を目的の
若の二返宿原五ヶ所よあかとかま

大権現(げし)とけきすまら共士

せたまた又永井若丸遠ら
人 釣命に
か勝や

やもいふまゝやせあやうりて訪来い
る時亦部より合控よびて城介此
城より二の丸まゝ穴をかりて中
に志のびて敵の城よ入く火とるふり
是よりゆるく敵よくく敷北して
わきこれ首とゆり

大権現よりかつご軍功を感しなま
し後を別や後列のさくひ第城
あへん美父子

大権現の依りより教向より時甲列

勢八達山よりたじろとえ美依勝と敵
返りつり居ると後敵又お

と美井山よりかきえ美又これとせあやぶ

つくり居すに信玄之浦右馬助

を大おやと美井山とおれ

え美父子いぢみたかつおほく敵を

くらぬ右右馬助敵をす

大権現をこわしときこりし
忠切と感

一たまひて御感状とたまはれ信感
今に是と所持とをこゆむにいとく
と度山中に教ありてをよき表出因
相踏く系文法難の忠貴向後承不
下油の仕名やの如件
天正五年

九月十一日家康御判

おののふか
おののふか

元真信勝を別光ゆ山のやうかに居て

甲別勝よちをくせめらるるやしのせも
かろくまきよまのりるぬ信玄大軍とに
こしてよせきさるる處をこれきこえわりけ
まごはらりかよららかろけん事とてふ
あやうきおり

大指規こまごまこころりし御自身御馬
よらうらねへまのりし御方(まごえけ)に
ご信玄軍と川をりりかくる後元真信
と辭して退居す

天正五年十月十五日病死 法名淨安

信勝ふり

孫一郎 生國後河

大権現よつふたてまの信勝ふりくくひ義

引ひわく甲列けい本ほん築つきれれわわりりおおににおおとといいじじ

中なににいいれれととせせああらら

長久ながくのの合あ戦せんれれ時とき

大権現おほよりよりええままひひままりりてて軍ぐん切きりわりり

大権現おほ為な別べつ蟹かに江えはは教しゆ向きやうありりてて前まへ田でん五ご十じゆ段だん

前まへ田でんのの城しろととせせああらられれりり時とき石いし川がわ御ご着ちやく寺じやう教しゆ正せい

二に信しん勝しやう二に人にん敵てきれれああののててととおおりりてていいままとと

かからら友とも城じやう中ちゆうああににかかつつくくははおおふふ城じやうとと

ままりりててははああままにに

大権現おほ昔むかし此こゝ城じやうにに清せい津しんありりとと二に人にんののまま

いいややおおははままにに合あ戦せんのの事ことととここりりせ

たたまま

天正五年正月二日に死しすす四十九しじゆう歳さい

法名源正

信盛

播磨守

生國彦

父信勝信盛とたつとく伏見にあり

大権現（すゑんえをれ）

安永五年信勝大坂少く死にあり

信盛大坂小つとふとく信盛細の

あり

大権現信盛が家信と大坂一の

主領と信盛とたまふとく

同年小山陣れ時本多依波寺正信

属して軍事とつとむるに

台津院殿より信之

同十年

台津院殿沖上流れ時信之と

利勝とつとむるに二條津城の唐門

津書とつとむるに

同年は、あまのすくなく、あまの書院書とほごり

新、あまの時信整これとつとむ

その後、あまの釣命いより、あまの板倉因防と重宗

小つりりく、あまの沖小姓とみよのり

大坂あ度の、あまの沖陣と信守と信俊

台座院殿の命いより、あまの沖からいり

たり、あまの沖書院書と信守と信俊

元和六年、あまの信五信下に叙と

同七年、あまの女沖入内、あまののつとむ

正成

同九年、あまの大沖書院書と信守と信俊
の沖書とあ度のつとむ

二郎 信清

慶長六年、あまの十二歳あつとむ

り

大権現へはつとむ

元和二年より

台座院殿よりつとむりて、あまの大沖書と信

如心

寛永九年

將軍家（一）かぶ

同二年沖馬揃（いまはら）時來地（まいる）をねん

同六年大沖番（おほい）の組頭（ぐみづか）とらる

同十年沖和増（おほ）ありく來地（まいる）五百石

たまたま

信友（のりとも）

赤石廊

生國（なまくに）武州

寛永十七年二月廿五日（にふ）はしめ

將軍家（一）をねん（い）なりて沖小姓（おほせうじ）あり

信之（のりゆき）

赤一廊 丹波（たんは）守

生國（なまくに）同（い）あり

母（い）ハ保科（たねし）彈正（だんしょう）女（むすめ）

寛永九年（い）はし下（しも）に（い）叙（しよ）す

女子

小か（こ）と平次（へいじ）書（しよ）

母（い）ハ上（かみ）に（い）同（い）

女子

向井左衛門妻 母はこに同

信孝

平三郎 生母同前

母はこに同

元和七年付しめく

將軍家と稱しめく

寛永六年十二月 釣合にありし御書院

書れくといつたり 翌年正月より

女子

御書院つとむ

同十二年御小姓組にありし御書院

服部本之助書 母はこに同

貞信

同前 生國同前

母はこに同

寛永十二年付しめく

將軍家と稱す

同十二年^{（一）}沖書院^{（二）}書^{（三）}れ^{（四）}銀^{（五）}より^{（六）}り
翌年^{（七）}正月より^{（八）}沖書^{（九）}を^{（十）}は^{（十一）}じ

家^{（一）}紋^{（二）}丸^{（三）}の^{（四）}内^{（五）}小^{（六）}柄^{（七）}丸^{（八）}系^{（九）}或^{（十）}丸^{（十一）}の内^{（十二）}之^{（十三）}

●
将重 まさしげ

三河守 みづのり

中園作列 なかつゆり

有賀 ありが

家傳 けでん といく満仲 まんちゆう の弟 てい 波枝 なえ 十代 じゅうだい
返訪 へんぱう 左郎 さろう 盛重 もりしげ 末孫 すえそん たり たり 先祖 せんぞ
返訪 へんぱう の内 うち 有賀 ありが の店 みせ と領 りやう も も たり
よりて よりて 子孫 しそん 有賀 ありが と と 孫 そん 号 ごう やす

武田信虎たけのぶに
信玄のぶに
信玄のぶに
信玄のぶに

禮負れいお

下総守しもとのり
生國甲州なまくに
信玄のぶに
信玄のぶに

貞重さか

十左衛門じざゑもん
生國甲州なまくに
勝頼かつらゆに
勝頼かつらゆに

天正三年五月廿一日長藤ながふじに
法名日晴ほりなひはる

将政しょうせい

武部ぶべ
生國甲州なまくに
勝頼かつらゆに
天正十年八月てんしゅうじゅうねんはちがつ

大権現おほいけんげん一統いつたう之の身み系けい
天正十年八月てんしゅうじゅうねんはちがつ二十にじゅう二に日にち病いひ死に法名日晴ほりなひはる

持次 たねつぐ

牛之郎 うしのお

生國回 なまくにまわ

台漣院殿 たいれんいん

元和七年 げんわしちねん 年十歳 としじふさい にて にて 病死 ひやうじ 法名曰壽 ほふなひつしう

持親 たねちか

牛丸馬 うしまるま

牛國成 うしくになり

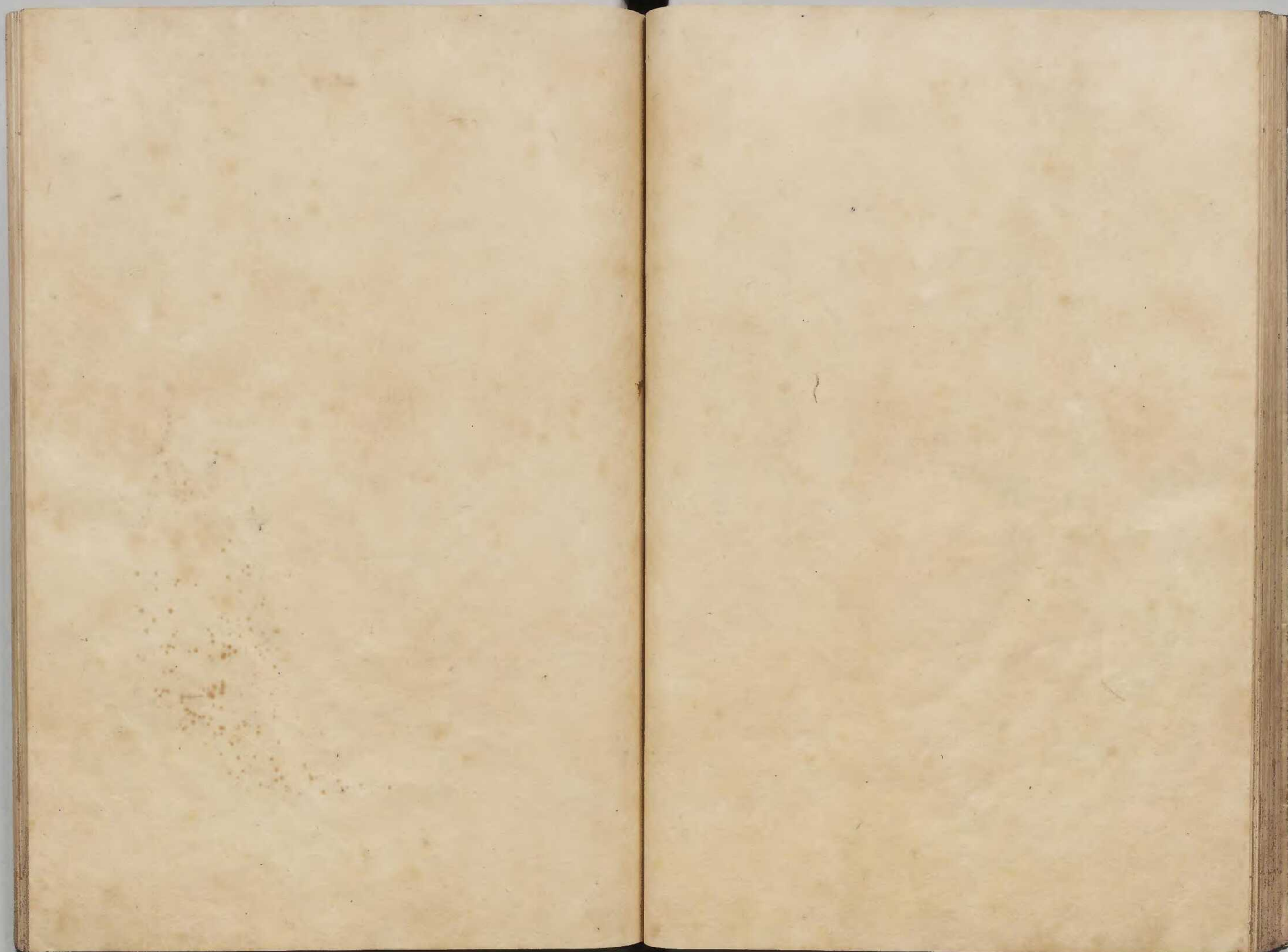
元和二年 げんわにねん 十歳 としじふさい 死 し

台漣院殿 たいれんいん を を 誅 つひ したる したる

寛永元年 くわんえいげんねん

將軍 しやうぐん 家 け 一 いつ 流 りゅう 入 いり したる したる

家 け 故 こ 丸 まる 内 うち 下 した 梶 かぢ の の 茶 ちや



法和天皇御代

満仲

下野守

満仲少

序桐

はつめ序切たりせり少も為真代
よる序桐一わくたじ

海國

甲斐守 俊下 燈守と異す

序桐の祖

為海 あまら

為公 たけのみ

右馬頭 ひまうし

信濃守 しなののまも

伴那 ばんな

為基 ため

源八 げんぱち

為新 たけあらた

源六 げんろく

為彦 たけひこ

七郎 しちらう

為長 たけなが

源六 げんろく

宗重 むねしげ

小八郎 せいはちらう

為信 たけのぶ

為家ノ

四郎

為後ノ

四郎右衛門

子ナ

為清ノ

為直ノ

又三郎

子ナ

源祐ノ

大史ノ

為頼ノ

遇ノ

生國ノ

十七歳ノ時ノ江川ノ一ノ子ノ歳ノ四十八歳ノ少ノ死ノ去ノ

片桐孫左衛門

天正十九年癸卯年七十 法衣一冊

直盛

卿作 東市正 法衣位下 生國因あ

柳津おりて 少く我功ありしより秀吉

感懐たまひしを感懐よいく

と度之七殿依謀叛濃川大柳と弟陣

慶宗田修理亮至柳津におく糸為

可及一我一誇能向し 慶宗掛涼付る

早急若くは秀吉於眼前合一書捲其

働立給し糸為慶宗之糸之宛宛宛

汗向復身し 依忠勅可を依忠者也

天正十一

六月又日

秀吉

片桐卿作

天正年中秀吉信長姓たまひし名宗と

因えわあし

元和元年病死 年六十

元包

以郎助 出雲守 後位下 生國指別

実子 元包に 子 元包に 子 元包に

とゆづ

寛永十五年

東照大権現

右注院殿一ツ あり

將軍家より あり

元和年中 関八州 あり 名宗と 孝利

寛永十五年 病死 年二十八

元

生國城列

幼少乃 時 後 府 あり

大権現 (津目見)

元和六年より 江戸に あり

貞隆

加吉藩封 主膳正 従五位下 生國江列
備前之本 およびてよおわく 徳討れ名
これあるにあり 秀吉より 備前 榊原
那の国より 徳知とたまりける
元和元年より 江戸にお移りて 奉仕
寛永四年 病歿 六十八歳

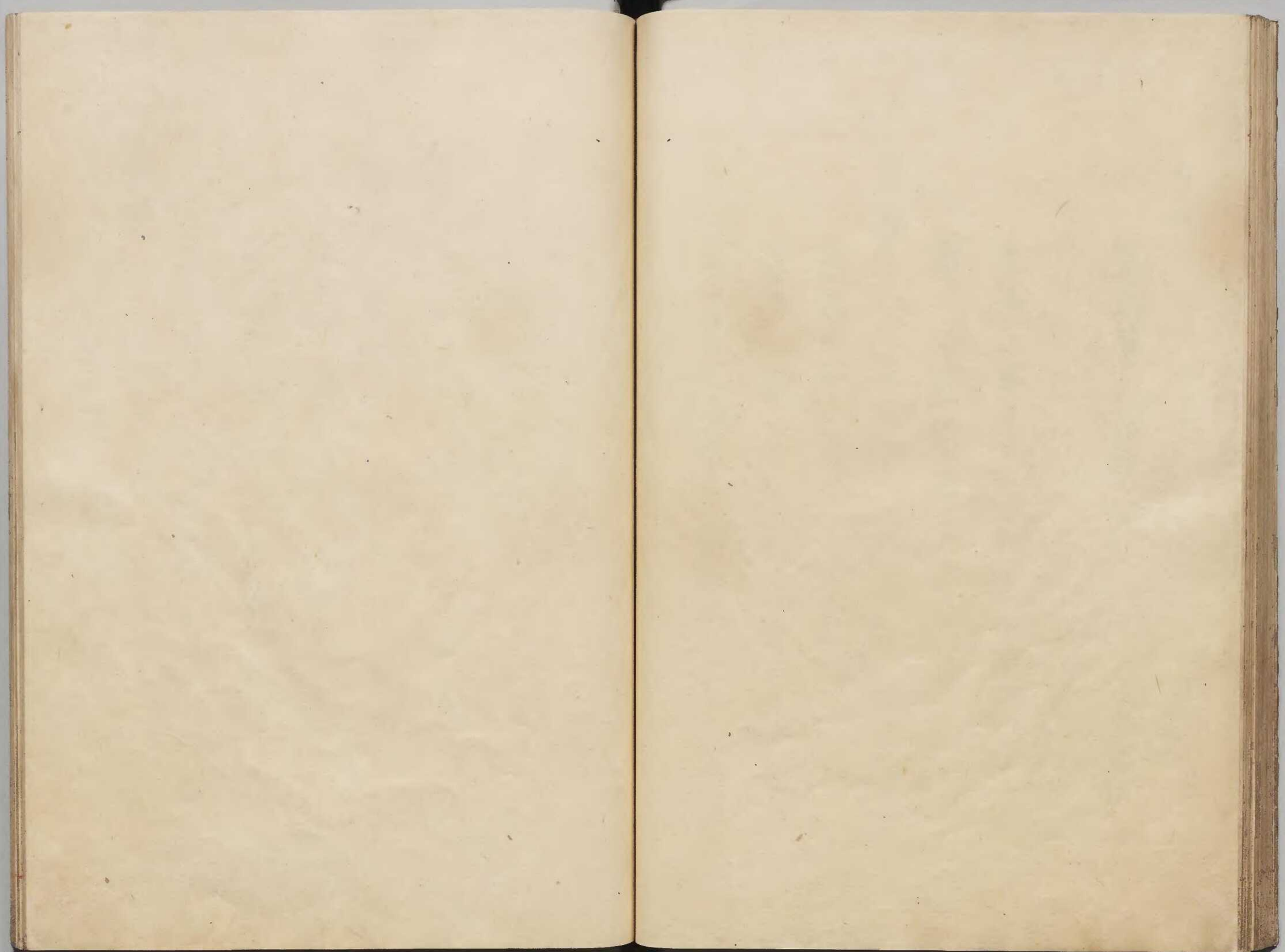
貞昌

長之助 石見守 従五位下 生國松列
元和三年より 江戸にお移りて 奉仕
はとむ

貞晴

勝七 生國同列
元和三年より 江戸にお移りて 奉仕

家紋の刻印



知久ちく

備後守びごうし

為公ためこう

大馬助おほまのすけ

後之位下

伊豆守いづのし

信濃守しんのうし

母河内守ははのちのうし 頼信よりのぶ 女むすめ たり

為衡ためひら

中津兼右衛門なかつかねゑもん

為貞 たけさだ

中津宗右衛門

頼繼 よりつぐ

中津宗小右衛門

信貞 のぶさだ

知久右衛門

正嘉二年 鎌倉に於て 武考の 人
教小くしる

行性 ゆきさだ

四郎左衛門

文永寺

宝泉寺

法令

真阿 まにあ

覺性 かくしやう

行阿 ぎやうあ

小林の先祖 こばやし せんぞ

祐起 ゆうき

家傳かでん小いしく室町將軍むろまち家いえ承うけ継つぎれ君達きみたち
之義ゆきより錦にしきの母衣かろよりよび小藩こはんとた
まつ書懐かえれわりの後のち藩はんの級車きゅうぐるま傳つたえ
りしるるるるるの級きゅうやむ

禅久 ぜんきう

女子 こし

之義の母儀 ゆきのかみぎ

寄山 きさん

彩舞 さいぶ

信部 のぶ

伯元 はくげん

法全寺 ほつぜんじ

学遊 がくゆう

心源

山城守

大量

巨岳

彈正少弼

宗詢

密宗院法印

元中

氏部少輔

敦真

隠岐守

仙耀

竹園院

易光

氏部少輔

宗顯 そうけん

悦心 えっしん

安房守 あはのり

白月 はくげつ

瑞桂 ずいけい

梅渚 うめしづ

園菴 えんあん

頼元 らいげん

大和守 やまとのり

新康 しんこう

田原左衛門

新氏 しんじ

武敏少輔 ぶみんしょうぶ

近江佐下 おうみさか

大和守

伊豆守 いづのり

天正十年

東照大権現御在系の御は

賜す修長生書入後

大権現伊願海より濱松へ河内國へ時信
ひす

四年七月信別伊奈の郡本領より
小島より知りせしむべきれ旨河内判
と頂戴す

大権現河内陣より時信宛也おも
甲府より河内酒井九邊尉忠次く
子少く甲府河内等の河内書とつとむ
後小田原氏直が士卒若河子より

おふ時忠次こころあはせ河内河内書と
かこころあはせ聖子信別信久の郡前
山岩尾の城ありにおおく一義とわけ
士卒自負ありなり河内修理大夫
家中の勇士河内軍忠あり

則也

伊丸書

天正十九年正月

大指現沖と海乃時太久保七郎左衛門小田原
此城一におわく則直事と上岡
一達一けきむすふらりかほま
板倉四郎左衛門 信付ら進涉技坊方
とたまつる時十三歳
慶長六年正月伏見此城におわく大
久保相模守忠隣に命せしむ信川
伊奈郡あく之子石の領地を相領む

直政

内務介

元和元年

右徳院殿を評したてまつる時十三歳

忠明

伊助

寛永十七年忠明十三歳乃時

將軍家と相承り

家の紋車輪
とのりんろまのわ

正國 まさくに

越中守 えちごのり

生國回前 なまくにのり

尾代守 おしろのり

勝永 かつなが

室領大和 むろのり やまと

生小回前 なまこくのり

剝髮して一系無と号す はくはつしていつけいむとごうす

秀正 ひで

越中守

生國回前

尾代守

實ハ勝永子ナリ 正國書子也 まこと

天正十年

東照大権現（福）なり 小田原沖陣（原）

沖陣大坂支度（陣）に修（修）すの河津（河津）

舟（舟）を修（修）す

後（後）

室領源七郎

生國回前

天文十九年

大権現（現）と相（相）なり 大坂支度沖陣（陣）

あつごひを

えわ七年

台座殿の約命と

お軍あよほくをり沖津村の作付

ら

正後

源七郎

生國武川

室領と

実ハ考正ひでが子なり海後うらが書子アなり

元和七年

お軍あよほく

寛永十六年七月十二日小十人乃但頭小

信守

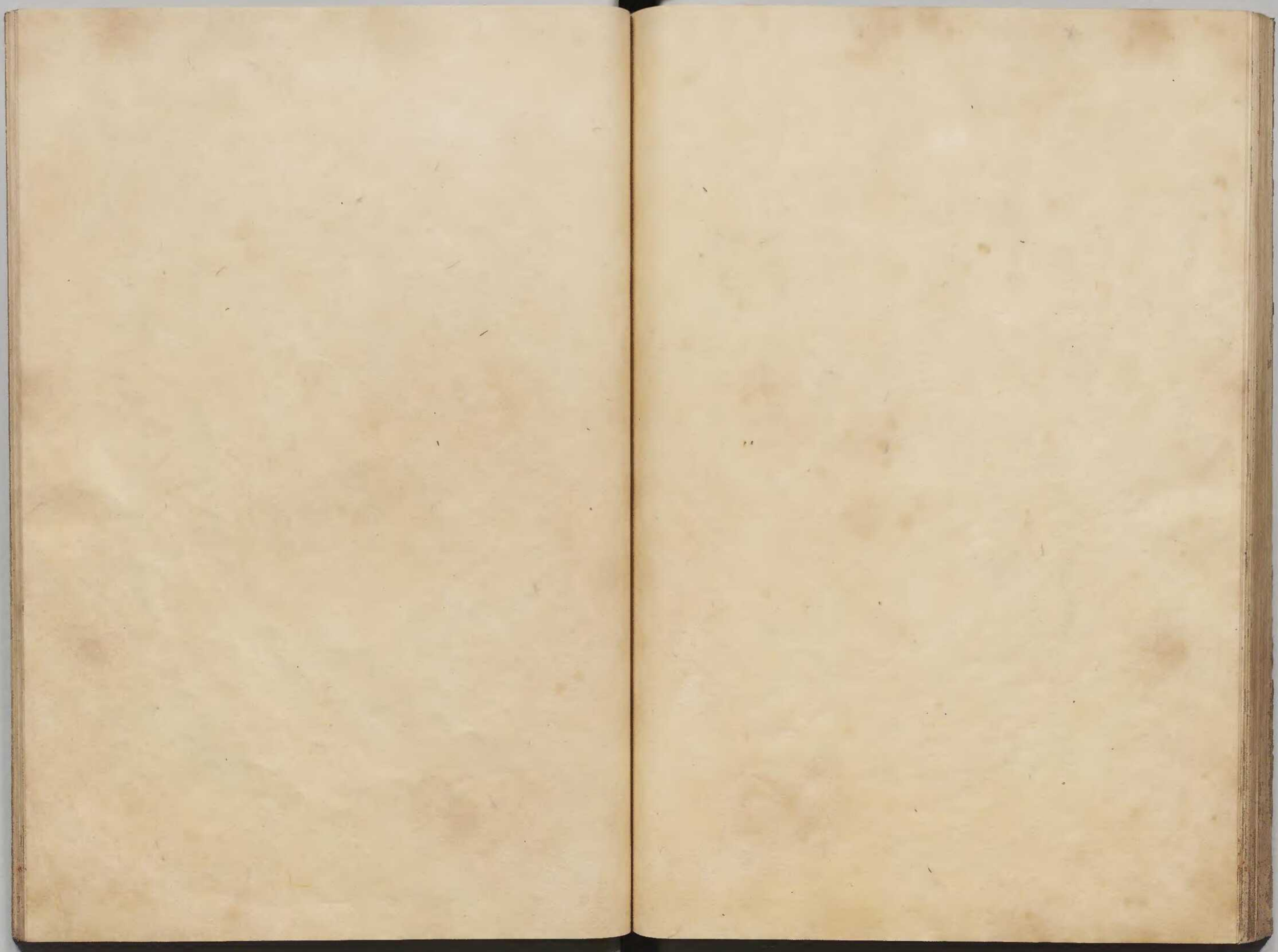
志正

越中守

生國同あ

屋代やしろ也

敬致丸の肉しのりとこれ字 室領むろの致同あ



● 某 それ

諏訪部 すわが

海使代伊豆掾為公六世乃孫孫孫
以帝幸杖後流たり

安藝守 あきのり

生國相列 なまくに

法名道順 ほりなみ

父以時 ちち 小保早雲 こたも 一属 いちぞく

定久

お母守

生國回前

定勝

お母守

生國回前

法名念叟

小條氏政よりいふ氏政の命にありて後
小條お房守氏那に属し秩父日尾
の城に留む

天正十六年十二月十七日病死五十二歳

定吉

お母守

生國回前

他父お母守定次お孫子よりありて氏政
氏直よりいふ小田原落居の故氏直高野
一也山に時是より去るひ又氏直大坂より
ありて死期あり時より去るは去るは
又禄元年肥前名護屋あり

東照大権現と評したくまの系

寛文元年お別小て来地とたまふ

同五年園原沖陣の時

大権現の信也と

同十四年をいしく加増の地をなまふ

大坂支度の沖陣より信也す

元和二年後別より江戸よりして

右注院殿と抄に在り

寛永八年

將軍家一統の系

定矩

源二郎 生國お別

参上長十四年

右注院殿と抄に在り

大坂支度の沖陣井上自守頼正統

くみり属して信也す

元和二年沖切米と抄に在り

同七年沖馬ひま乃役やくとおほせつりら

寛永九年

將軍家しんぐんけ一統いつとう之の世よ終はつ

以上の二つがのん
家紋概系

宅童ノリガ

飯田いひい

沐巻ヤ

生國尾列しやうこくび

織田信雄とよたのぶひより

天正十二年てんしやうじふにねん沈川しんせん一益尾列いちえきび蟹江の城かにゑのしろと

せしふにいよ

東照大権現蟹江の城とくくりんため

沖馬の時宅重父子沖馬内者いんまうちこう
く修しゆすすとと後ご

大権現おほごんげんより流ながるる大おほくくままつつる

六十二歳むそにじふにさい少すくくく病びやう危けい 法名ほふな夢ゆめ后ご

宅重たくしゆ

源一郎げんいちろう 生國なまくに同どう家け

美みハ山田やまのたに在あるる射やりり宅重たくしゆのの子こ方かたらら子こ孫まご子こ
こ修しゆふふなな飯いひ田でん也や孫まごと

夢長ゆめなが又また年とし伏見ふし見ににたたわわく

大権現おほごんげんよりよりままるるんんええたたくくままつつるるすすふふらら

本領ほんりやう尾法おひはふのの玉たま丸まるらら砂すな子ことと相あ似にと

大権現おほごんげん園の東ひがしにに沖馬いんま時ときのの時とき沖馬いんまととああるる

りりてて修しゆふふななのの六十二歳むそにじふにさい少すくくく病びやう危けい

法名ほふな慶雲けいん

重次しゆじ

四郎しろう左さ衛ゑ 中ちゆう國くに尾お次じ

くわめ織田信雄は清久は高尾前
守利長一属と

天正十八年

大権現を禱したてまつり進物の清書

と清とむと後大沖書に組頭とたり

將軍家乃沖代也なりて清役者なり

と後清目付の役をつとむ六十一歳

少く病死 法名常雄

重
重

四郎左衛門 生國同家

元和三年

左衛門殿と稱して大沖書をつとむ

重
勝

十善 生國同家

將軍家より清久たてまつり

重
正

九郎三郎 生國武列

將軍家一統之世系

家^{いかりん}改^ま丸^{まる}の内^{うち}一^{ひと}本^{ほん}行

正信 まさのぶ

松本 まつもと

伊頃 いかけ

生國氏別 なまくにりべ

成田下総守にまゝぶ なりたしげのり

正吉 まさよし

森吉 もりよし

生國氏別 なまくにりべ

成田左衛門佐十郎左衛門佐十郎
正吉松本伊豆守と成敗と内侍
おろく死す

正重

次郎右衛門 生國同家

成田左馬助一房一其後

台徳院殿

將軍家と御一其後

家紋訂費

